

Ⅲ-2

鯨漁をめぐる 江差浜漁民と問屋(商人)



30 檜山番所とその界隈

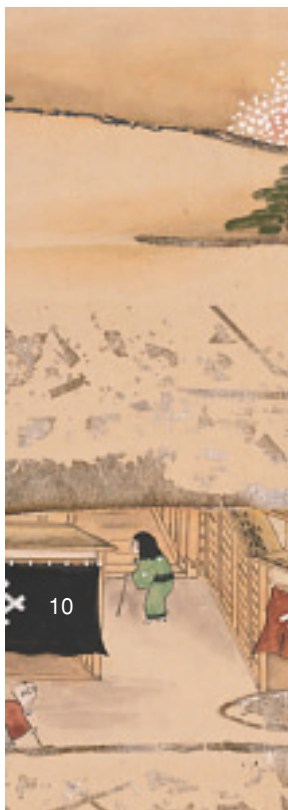


- | | |
|---------------|------------------|
| 1 檜山番所（江差役所） | 8 庭園 |
| 2 堀 | 9 ※（イチイゲタ）印商店？ |
| 3 階段 | 10 ※（イゲタ）印祥屋又兵衛店 |
| 4 役人 | 11 旅人 |
| 5 下代、あるいはお供の者 | 12 行商人 |
| 6 檜木 | 13 九艘川 |
| 7 柵 | 14 北豊橋 |

図絵は江差の南中哥町にある檜山番所（1）とその界隈である。九艘川（13）に沿った江差の九艘川町の高台にある土堀で囲まれた、檜造りのひときわ立派な建物が檜山番所（1）である。なかには牢屋もあったという。もともとこの番所は檜木山の支配・管理を行う役所である。厚沢部山中の檜樹の開発に伴って、延宝6年（1678）に上ノ国から江差に移転し、上ノ国から熊石までの西在郷を支配した。江差沖の口番所の業務も総括した。つまり、全蝦夷地の山林行政を分担し、江差町の町政のみならず、西在郷の行政をも管掌した。天明3年（1783）の「東遊記」には「檜山番所といふ役所あり。下タ代兩人十日替りにて勤番す。当時は村上弥三兵衛、斉

藤佐兵衛といふ者なり。いづれも徒富家にて、篤実にして才気あり」とし、続けてその附録には「此地古は良材多く出、波打ち際よりたちしげり侍るが、今はきり尽して海辺には少し。エサシに檜山番所という所のあるは、其頃の名目の残たるなり」（『日本庶民生活史料集成』第4巻 三一書房 1969年 p420、431）と記録されている。

所在地は町並みより上った山の中腹に造営されていた。構内には詰め合いの役宅も併設されていた。番所の前には柵（7）に囲まれた庭園（8）がある。下役在住の者の役宅は構外にあり、同心、地役人は番所の外の所々に別宅をもち、そこから日々通勤したという。



番所の職務として、江差在の者が西蝦夷地石狩辺に鯨漁に出漁する（追鯨漁という）ときや江差前浜で漁業を行うときは、番所が役金徴収と鑑札の発給なども行った（松田伝十郎「北夷談」前掲『日本庶民生活史料集成』第4巻 p161）。松前藩時代、江差在の者共は「江差奉行」と呼び、西在一帯に及ぶその権限と威光はかなり強いものであったと伝えられている。そうした権限の強さと取締りの厳重さ、江差町域の狭さが関係したのか、治安は非常に良かったといわれる。「土地せまき故か取しまりよし博奕などする者下賤の者にもなし。童部宝引をひく事も役人をおそれてせず。常には乞食、小盗の類かつてなし。山蔵とて市中を七、八町もはなれたる山中に家々の蔵あり。錠前はおろしあれ共番人といふ者なし。しか共矢尻など切事更になし」（前掲「北夷談」p421）という。こうした治安状況の中、黒羽織に脇差を差し、杖をつきながら今にも番所に向かおうとしている役人風情の者（4）は日勤途中の下役か地役人であろうか、その側で妙に役人に謙ってい

る人物（5）は下代か、それとも単なるお付きの者であろうか。

この辺りも土地が狭かったようで、すぐ並びに商人店がある。※（イチイゲタ）印の商店（9）は業態も名前も不明である。※（イゲタ）印祥屋又兵衛店（10）は近江八幡出身の近江店である。江差の「橋本屋鈴鹿甚右衛門文書」（『江差町史』資料編第3巻 1979年 p909）に蚊帳荷造りに関わる祥屋との仕切りが残されているので、祥屋は蚊帳か、あるいは荷運商いを営んでいたと推測される。よく注意してみると、祥屋の横の玄関奥には鼠色の暖簾が掛かり、さらに暖簾の奥には、土間に籠を置きつつある脚絆に尻端折り姿の、棒手振り商（行商人、12）の下半身姿が垣間見られる。何を売ろうとしているのかわからないが、物を売ろうとしている臨場感がそれとなく醸し出されている。

番所の直ぐ側を流れる川は南中歌町にある九艘川（13）である。九艘川の名前の由来については諸説がある。菅江真澄は「蝦夷喧辞辯」で、「市中に、九艘川といふ細ながれの川あり。此水上のおく山より、おほふね丸の丸か料の、ふな木を伐出したるいはれとて川の名におひ、処の名とはなりけるとなん」（『菅江真澄全集』第2巻 未来社 1971年 p28）と、九艘分の船建造材の伐出し、流送によって名づけられたという。実際、宝暦年間（1751～63）に、松前の風俗画家・竜田斎小玉貞良が描いた「江差屏風」（『江差町史』第5巻通説1 1982年 口絵）には、九艘川河口での大型船建造の様子が描かれている。弘化3年（1846）の松浦武四郎『校訂 蝦夷日誌二編』（北海道出版企画センター、1999年、p152）では「此川に昔し九艘程船が入りしといへり。今は中々一艘も入がたき川也」とあり、川への入船数が名前の由来で、幕末には1艘も入船できない川となったと伝えている。

こうした由来をもつ九艘川に架かる橋は北豊橋（14）である。この橋を渡り、またしばらく行くと、九艘川町と詰木石町にまたがる豊橋という、豊部内川に架かる板橋に到る。

31 沖の口番所とその前の中歌町を行きかう人々



- | | |
|---------|---------------------------|
| ① 沖の口番所 | 9 高札場 |
| 2 役人 | 10 ㄥ (イチゼンバシジュウ) 印・澤田重兵衛店 |
| 3 土蔵 | 11 ㄣ (イチカネ) 印・商店 (不明) |
| 4 火の見櫓 | 12 役所に向う問屋商人 |
| 5 門 | 13 手土産と酒桶をもつお供の女性 |
| 6 土塀 | 14 ヤッサイ鉤と魚籠を担いで道行く漁師 |
| 7 石垣 | 15 天秤棒で籠を担ぐ行商人 (魚場売り?) |
| 8 石段 | 16 旅人? |

松前藩は北海道と道外との船や人びととの交通、取引は必ず城下松前、江差、箱館の三湊を経由させ、そこに沖の口番所を置き、出入船舶や人、物資を検査し、稼ぎ役や越年役などの税、流通税など各種税金を徴収した。つまり、三湊以外の出入を禁じ、それ以外は密出入として処断した。沖の口番所は現在でいう税関、出入国管理事務所の役割を担ったのである。

というのも、農業の未発達に規定されて、農業に

経済基盤を置けなかった松前藩では「田畑を耕すこと無故別に年貢と申ものなし。其故に出入の旅人稼人并ニ諸国の廻船より運上をとる」(松浦武四郎『蝦夷日誌』I編、北海道出版企画センター、1999年 p95) というように、財政的基礎を流通課税に依拠せざるをえず、その徴収機関として沖の口番所を設置したからである。藩による流通独占体制の体现である。因みに、天保(1830～43)初め頃の松前湊の収納高は6000～7000両であり、入津荷物が

らは売高100文につき2文ずつを問屋が番所に納め、別に100文につき2文ずつを問屋が徴収する定めであった。松前湊ではこの問屋が8軒、江差湊には7軒、箱館湊には8軒あった（前掲『蝦夷日誌』Ⅰ編 p95～96）。

正面門構えの建物は中歌町にあった沖の口番所①である。石垣（7）の上にどっしりと築かれた土塀（6）の門横には「沖口」の看板が掲げてあり、門を入ってすぐの執務室には役人が下を向いて事務を行っている。その右手前には、番所からの通達を表示する高札場（9）が置かれていた。

江差沖の口番所の設置は寛永7年（1630）といわれている。上ノ国にあった檜山奉行が延宝6年（1678）に江差に移設されると、江差沖の口番所①は檜山奉行の分掌となった。職制として天明7年（1787）に沖の口吟味役（目付）が設けられたが、それまでは下代（地侍）と下役（小使・足軽）が実務にあたった。実際の運営は沖の口手代（江差問屋仲間から派遣された手代）が月輪番で出役し勤めた。つまり、問屋が収税実務の実際を代行したのである（『江差町史』第5巻通説一 第4章第3節2。なお、松前藩の失政から奥州梁川に転封したが、復領後の文政4年から番所を役所と改称した）。

そうした関係からか、羽織・袴の問屋と思しき人物（12）がお供の女性（13）に手土産と酒桶をもたせ、番所に伺候しようとしている様子ガリアルに描かれている。徴税機関たる沖の口番所は当然、抜け荷や違反金、荷物など摘発品の保管管理が必要で、番所奥にはその保管土蔵（3）が設備されていた。かなり頑丈そうな土蔵である。鍵穴とみられる穴が扉に付いている。屋根には万一の火災に備え、火の

見櫓（4）も設けられていた。

沖の口番所も、幕末には津鼻町に移転した。おそらく、移転は松前藩復領後のことであろう。「目附 壹人。下代三人、足軽三人常に相詰」めた。「廻船ども入津の時は先右の足軽共船に至りて改め」たが、その収納は「一ヶ年の運上金凡壹萬貳千両内外。然るに此近年」、すなわち弘化3年（1846）ころは「二万両ニも及ぶこと有由聞けり。米穀入津高凡一ヶ年に十万俵位也。貳斗入酒入津高二万樽位ヅ」であった。また、「船運上も昔より檜山運上と号、一艘の船より銀七匁ヅを納」め、「其七匁は砂金七匁にて当時直段正錢六百文」であったという。しかも米や酒の値段も砂金で勘定した（松浦武二郎 弘化3年『蝦夷日誌』2編 北海道出版企画センター 1999年 p145）。江差湊だけでも、かなりの取扱高であり、しかも砂金勘定とは江差湊独特の注目すべき徴収法だったとみえ、江差は藩内でも独自の経済圏であったといえようか。

ところで江差は町域が海岸に迫り、狭い。そのためか、番所のすぐ隣には商人店が軒を並べていた。/卅（イチゼンバンジュウ）印は澤田重兵衛店（10）である。業態など詳しいことは不明である（「岸田三右衛門仕込関係文書」『江差町史』資料編第2巻 江差町 1978年 p1143）。向って左隣も商店である。店前にㄣ（イチカネ）印の暖簾（11）を掲げているが、不明である。ただ、同じ屋号を使っている者に五勝手村の西川乙吉店があるが（天保8年<1837>「皇学舎門弟控」『江差町史』第3巻資料編 江差町 1979年 p1496）、以前に、江差町中に出店していたか否かは不明である。

【参考文献】

- 『新撰北海道史』第2巻通説1 北海道庁 1937年。
海保洋子『近代北方史 アイヌ民族と女性と』三一書房 1992年。
菊池勇夫『北方史のなかの近世日本』校倉書房 1991年。

32 江差町の姥神神社



- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| ① 姥神神社（別名、折居明神） | 8 鳥居の扁額 |
| 2 千木 | 9 社務所？ |
| 3 流れ造りの檜皮葺き屋根 | 10 桜の木？ |
| 4 石灯籠 | 11 令（ヤマキ）印の近江店福原屋利兵衛店の左隣接家屋 |
| 5 鳥居 | 12 法華寺坂 |
| 6 幟の柱 | 13 止印店 |
| 7 手水鉢 | |

姥神神社（折居明神、①）は藩主や藩民の崇敬を集める松前蝦夷地の一の宮である。文安4年（1447）年の創設伝説がある。最初、津鼻町の浜近くにあったが、江差町内岩崎の崖麓の整地に伴い、正保元年（1644）にその整地の所に遷座された。この遷座に伴い、所の地名も姥神町と改名された。安永3年（1774）には拝殿の社地替えが行われた。

姥神神社は当地の産土神であり、代々神主は藤枝氏である。^{※1}年頭慶賀の折には、役所の玄関で獅子神楽舞が催され、それには神主藤枝相模がでて勤めた。^{※2}

姥神大神宮の「社記伝記控」^{※3}は神社の由来を次のように伝える。Ⅰ〕この島は「春温遅く来り炎暑早く去るの珍地なれば、雑穀は熟すといへども稲の熟すことあたはさ」る所であること、Ⅱ〕2月初旬頃の深夜、於隣という鶴髪の老婆が寢床に指す弁天島からの光輝に寝覚め、島に渡ると、老翁がいて白水の入った瓶を与えられたこと、Ⅲ〕その瓶中の白水を春彼岸頃、海中に点ずれば瞬時にして米の泔水^{くき}のようになり、たちまち鯨が海岸数十町に群来したこと、Ⅳ〕それを春ごとに世業にすれば「永く飢寒の患なからん」こと、Ⅴ〕「鯨は自身の訓」で「必ず他に任すこと」がなく、老翁は「此島の守、此島の守護神」で「汝と共に国人を養護せん」といって消えたこと、Ⅵ〕島から帰った於隣は、神託に従って春彼岸に祈念して白水を点じたら鯨が数十町に渡って群来し、漁獲したこと、Ⅶ〕その結果、鯨漁は「万古不易の産業」となったが、於隣老婆は姿を消したと、などである。姥神神社はこの於隣老婆を神体に、「春秋漁業祖の神」として祀った神社である。別名、折居明神ともいう。

寛政元年（1789）に訪れた菅江真澄も、宮司藤枝

氏から聞いた神社の同じ由来を記し、「今は折居明神とあがめ奉るとなん。浦の子ら、おりん堂と申」と記し、加えて鳥居に掲げられた扁額（8）が陸奥国糠部郡田名部の玄德寺の律師、秀琳が黄金文字で書いた額であると伝えている。^{※4}なお、姥神神社①が藩主からも鯨漁業祈願所に指定され、藩主の巡国の折には祈願した神社であるから、藩主、あるいは供の者達の休憩などにも使われる社務所であったか（11）、と思われる。また、境内には安政3年（1856）に末社天満宮、慶応3年（1867）に海神社、創立年不詳の、金毘羅宮、門光稲荷社が建立された（前掲「社記伝記控」）。

ところで、松前藩は赤蝦夷（ロシア）との密貿易の嫌疑が掛けられていた寛政期（1789～1800）に、この神社に松前若狭守が額を一枚献納したが、その額の文字「降福孔夷」の孔夷の字を紅夷、すなわち「異邦之降福ヲ祈ル」と幕府側に誤読され、嫌疑をかけられ、松前蝦夷地一円の上地の一因ともなった。

姥神大神宮の横の坂は成曾山法華寺へ行く板敷きの坂（12）である。百間坂ともいう。^{※5}法華寺は京都本願寺末寺である。最初、上ノ国に創建されたが、のち江差町に移転した。^{※6}

扁額（8）が掲げられた鳥居の右隣は令（ヤマキ）印の近江商人店、福原屋利兵衛店の左隣接家屋^{※7}（11）である。福原屋の業態は不明であるが、あるいは福原屋の一部とも考えられる。向かい側にも商店がある。別の商人店とも推測できるが、暖簾は描かれておらず、家屋もほかの商人店より大きく、あるいは姥神神社の関係家屋の可能性もある。止印店（13）も業態不明である。

【参考文献】

- ※ 1 松浦武四郎「渡島日記」巻之参『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター 1988年 p.109。
- ※ 2 松田伝十郎「北夷談」『日本庶民史料集成』三一書房 1969年 p.160。
- ※ 3 『江差町史』第6巻通説2 1983年 pp.811-812。
- ※ 4 「蝦夷喧辞辯」『菅江真澄全集』第2巻 未来社 1971年 p.28。
- ※ 5 松浦武四郎「再航蝦夷日誌」、宮下正司、節『江差風土記』p.47、61。
- ※ 6 前掲「渡島日記」巻之参『武四郎蝦夷地紀行』p.114。
- ※ 7 文政十年亥十月 無尽帳『江差町史』江差町 1978年 p.703。

33 多忙をきわめる鯨刺網漁



- | | | |
|---------------|---------------------------------------|---------------|
| 1 鷗（ゴメ） | 11 車櫓 | 18 振り鉢巻き |
| 2 鯨の群来で白濁した海 | 12 藁製刺網 | 19 編み笠 |
| ③ 鯨舟 | 13 浮標・浮き樽・旗など
（タズ・アルケダンプ・
ボンデン） | 20 防寒頭巾 |
| 4 水押（舳） | 14 ヤリ網 | 21 藁帽子 |
| 5 鱸 | 15 家印木 | 22 シコロ付角頭巾 |
| 6 帆柱 | 16 ヤッサイ鉤 | 23 包帽子？ |
| 7 早櫓 | 17 鯨、春告魚、青魚、鯡、
鮠、荒れ魚（カド） | 24 刺子（ドンザ） |
| 8 早櫓の櫓引き縄（輪縄） | | 25 着物 |
| 9 櫓 | | 26 アツシ（アットウシ） |
| 10 櫓縄 | | |

江差前浜における刺網による鯨漁の様子である。鯨（17）はカド、2～5月の3カ月が漁期であるので春を告げる魚「春告魚」、青く輝く体色から青魚、非常に多く取れるから鮠、単なる魚でないとの意味から鯡とも書くが、松浦武四郎はそれらの謂れを次のように説明している。^{※1}

鯢は実に此地の第一の漁にして、蝦夷松前の産業七分は此魚に有。其に付鯢は和字にして、本名如何なる字に当るや。近頃青魚とも書が、然れ共其是と非を解せず。或人の説に、鯢は松前蝦夷の食物にして決て魚類にあらず。故に非の字を書也と云。又群来する時には海面数理の間浪の色を異にして、海面高くなる迄来る故に、

兆の字を書とも云り。其儀百千万億兆の義なりとかや。

前浜の海面が盛り上がるほど鯢が群来するので、それで鮠を書くところ。武四郎は自分の著作では一貫してこの字を用いているが、江差地方では海が時化する春に群来するので、「鯢は荒れ魚」とも呼ばれていた。^{※2}

松前藩経済のなかで、この鯢漁が重要性をもつようになるのは、大坂の後背地の畿内の綿作や菜種作、四国の藍作、紀州の柑橘作など商品作物栽培の隆盛を受けて、その施肥としての鯢肥の需要が高まってきた17世紀末以降のことである。畿内では消費物資を生産する様々な産業が起こり、近海の紀伊や和

泉などからの干鰯供給を受けて周辺農村では衣料原料の綿が作られるようになった。17世紀末までに摂津・河内・和泉・播磨・備後などにその生産が集中するようになると、18世紀中ごろまで瀬戸内海を加えて綿作が商業的農業の中心へと抬頭した。18世紀末から、それは東海・関東・山陰にも拡散した。しかも、この頃から和船の綿帆布も普及し、綿作の拡散がより一層進んだが、干鰯の需要増大とその価格高騰を招来し、肥効の良い鯨粕が注目・需要されるようになったのである。^{※3}

そうした需要を受けて、鯨が群来る江差ではだんだん鯨漁が盛んになっていった。天明4年（1784）頃には鯨は「房州の干鰯、五嶋の鮪」と並び称されるまでに盛んになった。^{※4} しかも「惣て鯨は砂浜に群来ざるもの故（略）昆布も不附鯨も無」く、「鯨は山際の岩石多き処え群来る魚」であった。^{※5} さらに、江差海岸一帯は菅藻や馬尾藻（ホンダワラ）が多く、鯨の産卵に好都合な漁場であった。鯨は夜から朝にかけて海岸に押し寄せ（群来という）、それらの藻に産卵した。鯨は他の魚とは違って、最初に雄鯨が海岸海藻（ゴモ）に白子を振り掛け、そのあとから雌鯨が産卵する。海の色が白濁（2）するのは雄鯨が海藻に白子を振り掛けたからである。漁民たちは海の白濁化、群来鯨の魚群を鴈（ゴメ、1）の騒々しい鳴き声によって知った。魚群探知機のない時代、漁民は鰹の群れを鰹に群がる鳥群（「なぶら」）によって発見するが、鯨群には鴈が寄り付き、それをみて漁民は鯨の群来を感知した。そしていち早く、浜のあちらこちらでは群来を知らせるマネ（白樺の皮の焚き火の煙）が上げられた。

漁民はその鯨を最初、原始的なタモ網で掬い取っていたが、のち刺網で取るようになった。それは延宝元年（1673）に越後荒浜の牧口庄三郎が松前に渡航して藁製刺網（金引苧網、12）を販売し、伝わったといわれる。それは幼稚な網ではなかったか、といわれているが、従来禁止されてきた西蝦夷地への追鯨漁（出稼ぎ漁）が元禄（1688～1703年）頃から緩和・発達したことも、この網の改良につながっ

て行った。^{※7}

江戸時代を通じて、江差を含む松前地は蔵入地（藩主直領地）が多く、家臣への給付地が少なく、しかも江差前浜は高間（磯舟の車輦く11）の止め木）改めと免判木札（高間税の納入を証明した許可証）の発給さえ済めば、自由に誰もが操業できる入会の海であった。かつ、慶応2年（1866）に大型の建網の操業が許可されるまでは、操業網は刺網（12）のみしか許されていなかった。^{※8} しかも、漁期には町の誰もが鯨漁に参加できた。少し時代は遡るが、天明8年（1788）、幕府巡見使に随って江差を視察した古川古松軒はその状況を端的に次のように報告している。すなわち「この魚二月の末より来て、三月四月を最中とせり。（略）蝦夷及び松前の諸人は、鯨を以て一年中の諸用、万事の価とせることゆえに、鯨の来れるころは、武家・町家・漁家のへだてもなく、医家・社人に至るまで我が住家を明家とし、おのおの海浜に仮の家を建て、我劣らじと鯨魚を取る」^{※9} と。その際、「食事も多くは握り飯などにて、濱に仮屋をつくり、（略）家内多くは濱にてくら」した。^{※10} 漁民だけでなく、町中の人々が大勢で鯨漁に参加していたのである。それだけでなく、近隣諸村からも鯨舟③が我れ先に出漁して盛況を極めたのである。

鯨舟③には大小あり、時代によって大きさや構造を異にするが、天明3年（1783）の「東遊記」（前掲 p429）には、鯨舟③に大船、乗替、サンパ、ホッチ、磯舟の5段階があったとある。それぞれの大きさは正確に判らないが、磯舟は長さ（舳先より艀まで）が3尺以下、保津知舟は同3尺1寸より4尺3寸まで、三半舟は同4尺4寸より5尺3寸まで、乗替舟は同5尺4寸より6尺まで、図合舟は同6尺1寸より7尺までである（前掲『江差町史』第5巻通説一 p472）。大船は図合舟のことと推測されるが、天明8年（1788）頃、浜辺の1、2町では岩石が多く、舟の底を破らないために底が「くりぬき」の2～4間ほどの磯舟を使っていたといわれる（前掲『東遊雑記』p137）。だが、図絵をみるかぎりそのようにみえない。描かれた図絵が正確に写生されたも

のかどうかの確認もはなはだ難しいが、図絵が描かれた時代、鯨舟③の舟底は刳り抜きであったとも、なかったとも断定しにくい。

図絵が正確に描かれているとするならば、鯨舟には水押（舳、4）のある舟もあり、また帆柱（6）のある舟もある。刺網漁には小前の者が2名乗り組んで磯舟で漁をするが、図絵には3～5名の舟乗り組み漁夫を描いている場合が多い。舟乗り組み漁夫1名の場合もある。

一般に磯舟の場合は1名が車櫂（11）で漕ぎながら、保津舟の場合は3～4名が乗り組んで、1名が櫓を漕ぎつつ2、3名で、40～50放の刺網を操業したという。そうであれば、図絵の鯨舟はほとんどが保津舟ということになる。ただ、なかには帆柱（6）のある舟③もある。これらの鯨舟は幕末により大型化し、19世紀中頃から舟にかかる徴収役金も増加するが、明治の記録には三半舟は舵・帆柱（6）・桁を運送のときだけに用い、舟の構造は保津舟と変わらず、ただ保津舟はミヨシ（4）を欠くだけだ^{※13}とある。こうした構造があまり変らなかったとしたら、帆柱のある鯨舟③は三半舟と看做してもよいであろう。そうすると、江差前浜では磯舟と保津舟、操業ができ遠距離でも鯨漁獲物を運搬できる三半舟（帆柱が付けられる）③が入り乱れて鯨漁に従事したことになる。

漁に携わる人びとは前もって江差檜山奉行から杣取りの許可をもらって簡単な漁具や櫓、鉤棒、浮子の木などの伐り出し・加工を行い、網の繕いなどをして準備を整えた。そして実際の漁撈では、出漁した人々が他人の刺網と区別するためにヤリ縄（14）に括りつけた浮標（タズ、アルケダンプ、ボンデン、浮き樽、旗など、13）と自分の家印木（桐製、15）を付けた刺網を思い思いに鯨舟から海中に下し、漁獲した。その網は幅5尺ほど、長さ8尺ほどあって、底のない網を5枚ずつ合せたものであった（「一刺し」という）。

網の上の海上には浮標（13）やヤリ縄（14）があり、「八、九寸四方なる板に家々の印を木にて刻み

是をたてゝうけとなし、又印とな」した。いわゆる先の家印木（15）である。数十艘の船で混雑する時は「此印をたづねて面々の網を引上」げ（沖上げという）、また他人の網の下になって、網を引き揚げられない時はそのまま放置され、網揚げ時期の遅滞から網に鯨が掛りすぎて、その重みで引き揚げられなかったり、網そのものを流失したりして、獲った鯨を失うこともあったという。また、夜中に海が荒れば網を流失することもあり、また「自他の網をわかたず他人の網にても是をたすけ、結ばれたる所をばきり裂きて網をたすくべきよし令を定めけるゆへ、網の損失すくな」く、しかも、浮標（13）の印には「利劔、蔵の鑑、草木の形、家々の印」があり、「船棧、あば板、もつこう、漁獵に遣ふ品、家の印、所書、姓名大字にしるしてまぎれざる様に」^{※14}していた。ちなみに、「もつこう」とは鯨を運ぶ木製運搬具^{※15}のことで、それはたなぎ畚（後掲）や木箱の背負籠^{しよい}があった。縄れた網を切り裂いてまでして漁網を助けることという法令まであったとは現在、確認していないが、操業秩序が18世紀末までに江差地域で整えられ、そのもとで鯨漁が行われていたのは間違いないであろう。

かかる操業によって、昆虫のケラのように刺網に突き刺さった鯨（別名、藻わら鯨、ケラ鯨、蓑掛かり鯨^{※15}、17）を漁民たちはヤッサイ鉤（16）で引っ掛けて舟上に引き揚げ、早櫓（7）と櫓（9）を操って浜辺に運んだ。鯨の群来が続く限り、2番網、3番網と昼夜を分かたず網入れをし、浜辺に運ぶという作業が繰り返された。

戦場のような忙しさのこの漁期には、漁夫たちが決して言うてはいけない七つの忌み言葉があった。それを破った者には制裁が加えられた。忌み言葉は鹿は角あるもの、鰯はこまもの、鯨はゑびす、鱈は夏もの、蛇は長いもの、きつねは稲荷、熊は山の人、山の親父などであり、この忌み言葉を犯した者は男でも女でも腰に大綱をつけて、大勢で巻きつけて曳いて歩き、あるいは海に放り込んで荒潮による辛い目にあわせた。これを逃れるためには、皆に酒を買

って飲ませ、砂地に額を擦り付けて詫びるしかなかったという。

さらに、忙しい鯨漁の時期に人が亡くなった場合は、葬式をせず、仮埋めにし、漁期が終わった時期、すなわち6月末か7月になってから改めて葬儀をする習慣であった（「えみしのさえき」『管江真澄全集』第2巻 未来社 1971年 p38）。現在と見紛うほどの仕事優先、鯨漁優先の経済合理主義が18世紀末の鯨場にすでに跋扈していたことが知られる。それほど鯨漁は江差経済、否、近世の松前蝦夷地経済にとって重要な産業であった。

その漁業に従事する漁民たちや鯨舟③を操ってい

る者の労働着を見ると、刺子（ドンザ、24）や普通の着物（25）、厚刺（アットウシ、26）を着ている者など、思い思いの格好で漁撈に参加していたことを知る。それは前述の『東遊雑記』に、漁民だけでなく、武家や町家、医家、社人に至る人びとまでが鯨漁に参加していたとあるので、労働着ということではなく、各自が思い思いの服、極端に言えば防寒に注意しつつ普段着などで漁撈に参加していたことが窺える。図絵にはそれが反映されている。ただ、厳寒の冬での操業である。片肌脱ぎや軽装に過ぎる漁民がいるのは多少疑問に感じられなくもない。

【参考文献】

-
- ※ 1 弘化3年『蝦夷日誌』2編 北海道出版企画センター 1999年 p.149。
 - ※ 2 『江差町史』第5巻通説1 江差町 1982年 p.482。
 - ※ 3 岡 光夫「大蔵永常 綿圃要務」解題『日本農書全集』第15巻 農山漁村文化協会 1977年 pp.415-416、p.427。
 - ※ 4 「東遊記」『日本庶民史料集成』第4巻 三一書房 p.429。
 - ※ 5 松浦武四郎「渡島日誌 卷之参」『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター1988年 p.138。
 - ※ 6 松浦武四郎『蝦夷日誌』卷之三 北海道出版企画センター 1999年 p.169。
 - ※ 7 『日本産業史大系』2 地方紙研究協議会編 1960年 pp.27-28。
 - ※ 8 前掲『江差町史』第5巻通説1 p.420、p.422、p.424。
 - ※ 9 『東遊雑記』東洋文庫27 平凡社 p.136。
 - ※ 10 天明3年 平秩東作「東遊記」『日本生活資料集成』第4巻 三一書房 p.420。
 - ※ 11 前掲『江差町史』第5巻通説一 pp.482-483。
 - ※ 12 「文久2年 港省衙規則」『江差町史』資料編第1巻 p.29、pp.37-38。
 - ※ 13 『北海道漁業志稿』国書刊行会 1977年 pp.41-42。
 - ※ 14 前掲「東遊記」 pp.428-429。
 - ※ 15 『江差町史』第5巻通説一 p.417。「北夷談」前掲『日本生活資料集成』第4巻 p.160。

34 江差浜に運ばれた鯨を刺網から外す



- 1 鯨舟
- 2 早權
- 3 アツシ (アットウシ)
- 4 菅笠
- 5 黒塗り笠
- 6 筒袖短着の刺子 (ドンザ)
- 7 黒頭巾
- 8 防寒黒覆面
- 9 肩上げ紋

- 10 蓑掛り鯨
- 11 簀台
- 12 刺網
- 13 浮子 (アバ)
- 14 沈子・碇石 (イワ・ナツ石・シズミ)
- 15 鯨の網外し
- 16 手舂 (たなぎ舂)
- 17 木製掬い鍬
- 18 焚き火

- 19 浮標 (タズ・アルケダンプ・ボンデン)
- 20 脚絆 (はばき)
- ㊦ 廊下
- 22 廊下の長板横葺き屋根
- 23 踏み板
- 24 柱
- 25 着流しの羽織を着た男
(仕込み親方の手代か、番頭?)
- 26 鴉 (ゴメ)

刺網(12)に蓑(ケラ)状にぎっしり突き刺さったままの鰯をそのまま鰯舟(1)で浜に運び、舟の艫から浜に乗り上げ、拵えた簀台(11)の上に鰯を引き上げた(江差地方ではケラ状の鰯を「藻わら鰯」といった^{*1})。簀台に藻わら鰯を引き上げたのは、岩浜の江差浜にそのまま上げたのでは鰯の処理に難儀が生じるからである。

待ち構えた人びとは簀台の刺網(12)から鰯をテキパキと外した。その鰯外しをしている人びとは操業している漁民たちと違って、皆、肩上げ紋(9)のあるアットウシ(3)やドンザを着ている。どうしてであろうか。理由は定かではないが、鰯外しには鰯漁とは違ったそれなりの経験が必要で、ある程度の経験者、ないしは「技能的」集団が漁場の仕込み(前貸し)親方などによって編成されていたのかもしれない。というのも、鰯外しの際に、鰯の腹子(数の子=鯀)や魚身(身欠を造る)などに疵をつけたり裂いたり、腹子がばらばらになるなどのことに気をつけて作業をしなければならなかったからである。

簀台(11)の横には焚き火(18)が燃やされ、鰯外しの人びとは時々、焚き火(18)でかすかな暖を取りながら、鰯外しに精を出していた。漁婦のなかには寒さを凌ぐために防寒用の黒い覆面(8)で顔を覆っている者もいる。しかし、足もとに目を向け

てみると、全員が脚絆をしているものの、真冬にも関らず、皆、裸足のようなのである。しかし、図絵全体をみると、他のすべての人びとの足元も裸足である。しかし裸足であったとは考えにくく、しかも草鞋などは描きにくい。草鞋を履いていたとみてよいであろう。

鰯外しに暖をとっているほど暇ではない様子である。暖を取っているものは1人もいない。刺網(12)から外された鰯は随時、木製の掬い^{すく}鉄^{てもつこ}杓(17)で手^{もつこ}畚(たなぎ畚、16)に入れられ、組みになった2人で鰯の一時的貯蔵庫である廊下^②に運ばれた。こうした一連の作業を鵜たち(26)も、海の上で羽を休めながら見守っている。

鰯舟(1)から浜辺の簀台(11)へ、次に簀台上の鰯外しが終わったら、2番網、3番網の準備のために子叩き棒かヤシャ鉤で網に付着した数の子や白子、鱗を叩き落とし、次の漁のために鰯舟(1)や刺網(12)などが整えられた。また、終漁の時は鰯舟や刺網(子叩き棒やヤシャ鉤で付着した数の子・白子・鱗などを落とす^{*2})、浮標(19)、簀台、運搬具などの点検と海水による水洗いが行われ、片づけが並行して行われた。当然、そうした作業の様子をみに、仕込み(前貸し)親方の手代などが視察にきた。羽織を着た着流しの男性はその手代か、番頭(25)であろうか。

【参考文献】

※ 1 『江差町史』第5巻通説1 江差町 1982年 p.417。

※ 2 前掲『江差町史』第5巻通説1 p.490。

35 網からの鯨外しと廊下での鯨貯蔵



- | | | | |
|----------------|----------------------|---------------|--------------------------|
| 1 檜板・横板化粧をした土蔵 | 11 櫓 | 20 アツシ（アットウシ） | ㊥ 仕込み（前貸し）親方（江差商人）と支配人か？ |
| ㊤ 長板横葺き屋根の廊下 | 12 簀台 | 21 刺子（ドンザ） | 30 羽織と着流しの着物 |
| 3 柱 | 13 刺網 | 22 防寒黒覆面 | 31 帯 |
| 4 板壁 | 14 浮子（アバ） | 23 菅笠 | 32 木杖 |
| 5 踏み板 | 15 沈子・碇石（イワ、ナツ石、シズミ） | 24 褌 | 33 白頭巾を被った羽織姿に黒着流しの着物の町人 |
| 6 蓑掛り鯨 | 16 魚籠 | 25 脚絆（はばき） | 34 赤振袖姿の少女 |
| 7 マタブレ（コマザリ） | 17 大杓（天秤棒） | 26 向こう鉢巻 | 35 下駄 |
| 8 手舂（たなぎ舂） | 18 白犬 | 27 腰掛割り竹筒 | |
| 9 木製掬い鍬 | 19 浜小屋（丸屋形） | 28 子叩き棒か？ | |
| 10 鯨舟 | | | |

江差浜の海浜幅は狭い。その浜辺近くまで江差商人の檜板・横板化粧をした土蔵（1）が迫っていた。その前浜で、厚刺（アットウシ、20）やドンザ（21）を着て、防寒用の黒覆面（22）をした、あるいは菅笠（23）を被った漁婦や、向こう鉢巻（26）姿や菅笠（23）姿の漁夫が簀台（12）に引き上げられた刺網（13）の蓑掛り鯨の鯨外しに精を出した。とくに漁婦に厚刺（アットウシ、20）を着ている者が多いのは、その服が「シナと云木の皮にて織り、日本より渡る染木綿の切れをほそくたち、袖口、かた、せ、

裾廻りなどに篆字などの如くなる物をさして模様と」したもので、「三湊のものも此服を調へて着」たほどであり、それは水に濡れてもこわばることがなかったからである（『東遊記』『日本庶民生活史料集成』三一書房 1969年 p422）。また、ドンザ（21）は刺子ともいわれ、綿布を裏表から細かに差し縫いした「もじり」着物であり、厚刺（20）模様を刺し込んだものもあった。ほかには袖なしの綿入れ着物を着用する漁夫・漁婦もいた（『江差町史』第5巻通説1 1982年 江差町 p497）。

さて、あとからあとから鰯の群来があると、漁民たちは競って刺網(13)を入れ、昼夜の別なく、刺網に刺さった鰯(6)を水揚げし、次々と浜に運んで来た。浜では鰯の網外しに忙殺され、一刻の猶予も許されなかった。図絵をみても、数台の簀台(12)に次々と鰯網が運ばれ、網外しが終わった先から、網についた白子や数の子、鱗を子叩き棒(28)などで網から落とし、網の片付けや、次に運ばれてくる鰯までの一時、簀台(12)の横などで休憩して待機した。

土蔵(1)手前の浜には、加工前に網から外した鰯を一時的に4、5日貯蔵しておく貯蔵庫(廊下、②)が造られた。これらの壁板は漁期前に檜山番所から許可を得て自分たちで、あるいは近くの山で杣を頼んで、木を伐り出し誂えたものである。これを「山取り」といい、鰯漁業前の大切な準備作業であった(前掲『江差町史』第5巻通説1 p430)。廊下は鰯の漁獲高多寡次第で外壁の板が一枚一枚高められ、より多くの鰯が貯えられるように簡便に造られていた。漁期が終わると簡単に撤去できた。

廊下に鰯がまず保蔵された。運搬は2人の漁夫が手畚(たなぎ畚)(8)に鰯を積んで、廊下に架けられた踏み板(5)を渡って格納した。鰯がだんだんに貯まっていくと、漁夫はマタブレ(7)を使って、より多くの鰯が入るように均し、あるいは次の魚坪^{なつぼ}に運ぶための準備として寄せた。廊下に鰯を一時的に貯蔵するのは、その間に数の子が固くなり、腹が柔らかくなって鰯潰しがしやすくなるからである(高橋明雄『鰯 失われた群来の記録』北海道新聞社 1999年 p59)。

鰯外し作業の横に建つ円錐形の藁葺小屋は丸小屋(19)である。数本の棒を円錐形にして括り、それを葺で巻きつけて組み立てた簡単な小屋で、突端が少し開いているのは煙だし用である。菅江真澄が寛政元年(1789)に相沼(爾志郡熊石町)で見聞した「丸屋形」(マロヤカタ)である(「えみしのさえき」『菅江真澄全集』第2巻、未来社 1971年 p30)。鰯漁の間、漁民たちが漁や鰯外しの合間に休憩した

り、暖をとったり、食べ物や飲茶、煙草を一服するために一時的に建てられた休憩場でもある。時には鰯と他のものとの物々交換の場になり、19世紀以降は簡単な飲食物や小間物を商い、時には「料理茶屋」などのように飲食遊興、酒色を業とするようになった(松田伝十郎「北夷談」『日本庶民生活史料集成』第4巻 三一書房 1969年 p160)。幕末には女郎屋にもなったが、鰯漁が終わる7月末には取り払われた(松浦武四郎『蝦夷日誌』卷之一 北海道出版企画センター 1999年 p146)。本来の役割は、漁夫や漁婦などが冷たい浜風を避け、暖を取りながら一服(喫煙)したり、白湯を飲んだりしながら休憩する小屋であった。18世紀末の当時、小屋での飲茶が普及していたかどうかは不明である。おそらく飲茶は一般的ではなかったろうと思われる。

ところで、漁夫たちが鰯外し、鰯の運搬と、戦場のように忙しい鰯場にやってきた、木杖(32)に着流しの羽織姿(30)の人物は仕込み商人とその支配人[㊟]であろうか。仕込み商人とは、漁獲物を抵当に漁期の操業資金や日常の食料、資材などを高利で前貸しする商人であり、江差ではそうした前貸しは3割高で行われていたという。しかも前貸金・物を鰯の現物で回収し、それを売った売買益からも莫大な利益を仕込み商人は得ていた(前掲『江差町史』p464)。いやがうえにも、鰯の豊凶が気になるところである。しかも、鰯漁は他の漁業と違って、豊凶が著しい漁業として知られ、仕込み商人にとって漁況は死活問題であった。仕込み親方やその手代などの漁況や鰯場での仕事ぶりの視察はその意味では当然の行為であり、それを見にきた様子である。

また、廊下の傍には、白頭巾を被り、羽織姿に黒着流しの着物を着た町人(33)が赤振袖姿の少女(34)を連れて、散歩がてら騒々しくも活気のある鰯場を覗き歩いている。鰯漁が江差町全体の経済と生活に密着していた生業であったことを窺わせる。また、毀れ鰯にありつこうとしている野犬であろうか、それとも飼い犬であろうか、白犬(18)が前浜をうろつき廻っている。生活感が感じられる。

36 鯧漬しと尻繋ぎ、鯧干場への運搬



- | | | |
|----------------------|---------------|----------------|
| ① 魚坪 | 10 黒頭巾 | 20 褌 |
| 2 藁葺き屋根 | 11 菅竹 (サシ) | 21 脚絆 (はばき) |
| 3 棟押さえの太縄 | 12 菅縄緒 (繋ぎづら) | 22 裸姿の漁夫 |
| 4 鯧 | 13 菅臭座 | 23 掬い鍬 |
| 5 風呂敷の頬被り | 14 鯧の尻繋ぎ作業 | 24 マタブレ (コマザリ) |
| 6 腰当・腰掛・馬板 (ムマ) | 15 繋ぎ連の鯧 | ㊥ 蓆囲いの掘立て丸小屋 |
| 7 手閥 | 16 手畚 (たなぎ畚) | 26 薬缶 |
| 8 魚籠 | 17 口腔に刺した尻繋ぎ鯧 | 27 焚火 |
| 9 吠様の蓆の膝入れ。下敷 (シロシタ) | 18 洗い鉤付き天秤棒 | 28 土留め木 |
| | 19 木皮綱 | 29 階段道 |

浜からの潮風がまともに当たる海辺の吹きざらしの、藁屋根だけの魚坪小屋①と呼ばれる小屋のなかで、鯧漬しは行われた。鯧漬しとは漁獲鯧の一匹一匹から鰓 (笹目)、白子、数の子などを身から選り分け、取り除く作業のことで、漁婦や女出面 (日雇い) がその仕事にあたった。

まず、廊下から魚坪①に運ばれてきた鯧を、女性たちはムマ (腰当・腰掛・馬板、6) に膝を折って腰掛け、足を2枚折りの吠様の蓆の膝入れ (シロシ

タ・下敷、9) に入れて鯧漬しをした。シロシタ (9) の蓆の間には樺の皮や笹の葉を入れ、鯧汁が染透っても濡れないように工夫をした。

作業は寒さと魚の臭気、魚脂粉鱗に見舞われての手仕事であった。鯧漬しは指5本が別々になっている手首と呼ばれた指サック (指袋) を使って鯧の腹を手で裂き、数の子と白子が取り出され選り分けられ、混同しないようにそれぞれ手閥 (7) や魚籠 (8) に分けて入れられた。鯧漬しはマタブレ (木鉤、24)

で魚坪の奥の鯨を絶えず前に寄せて進められた。図絵には描かれていないが、数の子は数の子小屋に、白子は白子小屋に運ばれるか、あるいは数の子はキツ（丸木の馬舟のようなもの）に運ばれ、大体4、5日たって卵子が固定したのを見計らい、蓆に並べて乾かした。手聞（7）に満杯になった白子は、日光の当たる場所に蓆を敷いて風通しの良い場所で乾燥させた。笹目はそのまま地面に敷き並べ、乾燥した。数の子は食料に、白子と笹目は肥料にした。^{※1}ばらばらになった数の子や製品にならない数の子を肥料にすることもあった。

鯨漬しの済んだ鯨は頭と尾を違えず、順序よく並べて置いた。それは次の作業、尻繋ぎが効率よくできるように備えるためである（14）。鯨の尻繋ぎ（15）とは鯨漬しの終わった鯨の口腔に菅竹（11）を刺して、菅縄緒（12）で連結する（「差し」に通すといった）ことである（14）。

江差では鯨の連結は22匹である。これを1連といい、これをさらに連結して51連にしたものが1束であり、1本（鯨1122匹）ともいった。^{※2}この連結は留萌や増毛など地域によって1連が21匹の場合もあった。^{※3}端数があるのは木架（魚架）に渡された早切で鯨を干す（本『絵引』37参照）ときに、鯨の重みや、あるいは腐りによって落下し、商品にならなくなる鯨もあるからである。つまり予め、落下、腐敗を予想して多く鯨を連結したのである。経験からき

た先行的補填対策である。

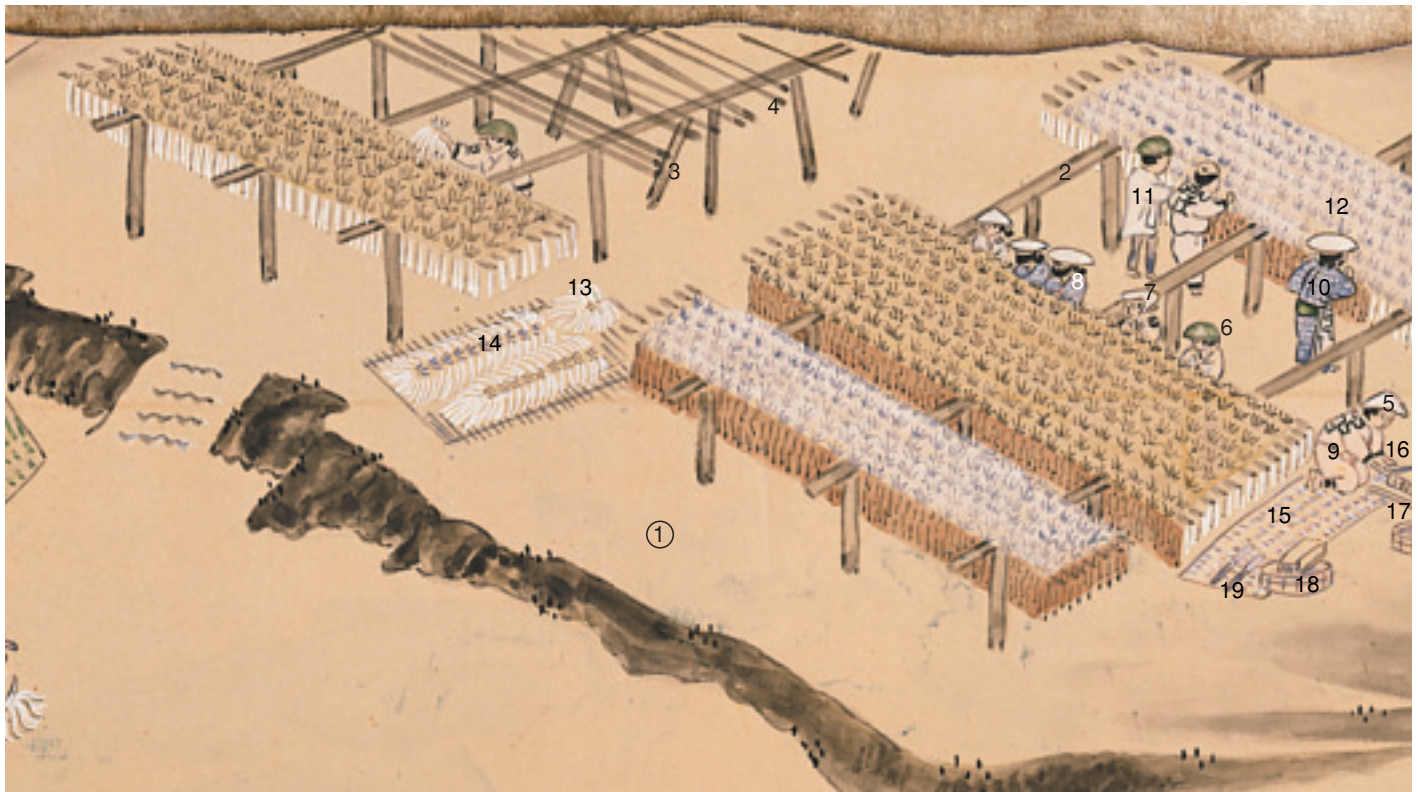
漁夫は鯨漬しの終わった鯨をそれぞれ分担して菅莫蔭（13）の上でテキパキと尻繋ぎ鯨（連結鯨）に造り（14）、それを洗い鉤付きの天秤棒（大杓、18）で木架のある干場に運んだ。天秤棒の両端の鉤に鯨の頭ほうからだいたい15～20連ずつ引っかけて木架に運んだ。それはかなりの重さであったが、操業・加工時間との勝負もあって、木架へ運ぶのも駆け足で行われたといわれる。^{※4}天秤棒を担ぐ漁夫（22）たちが皆、諸肌脱ぎであるのは、厳寒の冬とはいえ、それは汗が吹き出るほどの重労働であったことによる。

魚坪の近くにも漁期だけの荒縄結束、蓆囲いの掘立柱で支えられた簡便な円錐形の丸小屋^⑤（「丸屋形」・マロヤカタ）が建てられた。浜小屋である。上から吊るされた薬缶（26）が火に架けられ（27）、漁夫・漁婦たちがここで一服したり、白湯を飲んだり、暖をとったりした。一時的な憩いの場所でもあった。再言するが、19世紀に入ると、鯨場の仕込みが始まる4月頃から本州諸港へ向かう海運の絶える9月頃まで、丸小屋^⑤は江差町会所から許可を得た諸商人が出稼ぎ漁夫や旅人、船方相手に飲食や雑貨、古手などを商う店や、遊行・遊戯店、下級花街店にもなった。^{※5}とくに「鯨の魚さき、飯かしぐ女どもを中にのせて漁舟の来れば、鯨場にては女を、なかのりといふ」と菅江真澄は伝えている。^{※6}

【参考文献】

- ※ 1 北水協会編『北海道漁業志稿』国書刊行会 1977年 p.56。
- ※ 2 『江差町史』第5巻通説1 江差町 1982年 pp.490-495。
- ※ 3 高橋明雄『鯨 失われた群衆の記録』北海道新聞社 p.59。
- ※ 4 前掲『江差町史』 p.492。
- ※ 5 松浦武四郎『蝦夷日誌』巻之一 北海道出版企画センター 1999年 p.146。
- ※ 6 『菅江真澄全集』第2巻 未来社 1971年 p.38。

37 干場での身欠鯿の早切干し



- | | | |
|------------------|------------------|----------------------------|
| ① 鯿干（乾）場（納屋場） | 8 防寒黒覆面 | 15 菅莫座 <small>すげもざ</small> |
| 2 木架 | 9 アツシ（アットウシ） | 16 砥石 |
| 3 竿又・亦木（マツカ） | 10 刺子（ドンザ） | 17 砥石台 |
| 4 早切（木架に渡された細い棒） | 11 半纏 | 18 水桶 |
| 5 白菅笠 | 12 身欠鯿 | 19 鯖差（身欠製造小刀） |
| 6 菅笠 | 13 繋ぎ連の鯿（10～20連） | |
| 7 手拭い頬被り | 14 菅縄緒（繋ぎづら） | |

図絵は鯿干場①である。干場は納屋場とも呼ばれ、太い木架（2）と竿又（3）からなる。その木架の上に早切（細い角材、4）を載せ、天秤棒の先の洗い鉤に吊るされ、魚坪（前頁『絵引』36参照）から運ばれた尻繋ぎした身欠鯿（12）を男と女が共同作業でその早切（4）に懸けた。身欠鯿の乾燥のためである。木架（2）が頑丈で、かつ早切（4）に平均して尻繋ぎ鯿の荷重が掛からないと、身欠鯿の重さで木架が横倒しになり、鯿身が碎け、製品にならず、大損害を被った（これを留萌地方では「木架餅（やなもち）」^{*1}という）。

また、早切と早切との間隔も調整を要した。というのも、気候や風の通り具合などで身欠鯿の乾燥の良し悪し、乾燥時間の長短が異なったからである。したがって、木架には適当に身欠鯿を架ければよい

というものではなかった。それでも、鯿個体の良し悪し、軽重の差、尻繋ぎの良し悪しで早切から地面に落下する鯿も多くあったという。

落下した身欠は当然、商品価値が下がったが、これらの身欠も、また製品としての身欠も食料としてだけでなく、肥料としても利用された。当然、白子や笹目（鰓）、鯿鱗、胴（羽）鯿、はては数の子までもが18世紀初めから本州各地に移出されて田畑の施肥料とされたのである。享保2年（1717）の「松前蝦夷記」には「鯿并鯿子白子共江指村松前町ニ而諸国より船来積登ルよし、取分ケ鯿并白子中国近江路江積登、田畑作こやしニいたし申よし」とあって、鯿や数の子、白子が広く中国や近江筋に鯿肥として売られていた^{*2}。また、元文4年（1739）頃には、鯿漁は「海内一の大猟」で「干鯿を田家に用ゆ



る国々は南部、津軽、出羽、北国、近江へかけて是用ひ、其子は海内一面に用ゆる数の子なり。(略)江差と云所にて市をたて、数の子を俵にこしらへ諸国え売出す事^{※3}広大の事」となり、東北地域でも田圃の肥料に利用するようになった。さらに天明期(1781～88)になると、「むかしは北国のみにて用ひけるよし、今は北国はいふに及ばず、若狭、近江より五畿内、西国筋は不残田畠の養となる。干鰯よりは理方^{※4}よし」と、鯿肥の評判は高まっていった。加えて、発達した畿内から順次、中国、四国地方、尾張から三河にかけての綿作地帯、菜種・煙草・藍作地などでも病氣の出にくい良質の肥料という声価が高まった。

この図絵より時代が下った19世紀からは、大坂に松前物問屋もでき、肥効の良い鯿粕も生産されるようになり、いまや鯿肥を使って生産した「米穀半ば蝦夷地より出産すべし」(馬場正通「辺策発蒙」滝本誠一編『日本経済叢書』19、1915年)というような状況にいたった。鯿肥がわが国の農業生産、とりわけ菜種・藍・煙草・柑橘などの商業作物はいうに及ばず、田作にも欠かすことのできない肥料となったのである。^{※5}しかし、このような状態にいたるのはこの図絵の描かれた時代より、かなり時代の下った時期のことである。

身欠や数の子などが本州に移出されるようになって、やっと鯿漁も活況を呈するようになった。身欠鯿の製造も拡大生産へと向かった。当然、その製造も需要を受けて忙しさを増した。早切(4)が架けられている木架(2)の手前では、女性(9)が菅莫蔭(15)を敷き、鯖差(19)を砥石(16)で研いでいるが、この鯖差(19)は身欠鯿を作るのに使う包丁のような道具である。図絵では手直しの忙しさはみられないが、ここではおそらく木架(2)から落ちた身欠鯿を繋ぎ直して、再度吊るすために使用したのであろう。こうした情景は実は木架の近くのあちらこちらで行われ、それをまた漁夫や漁婦が乾燥させるために早切(4)に吊るし直したのである。

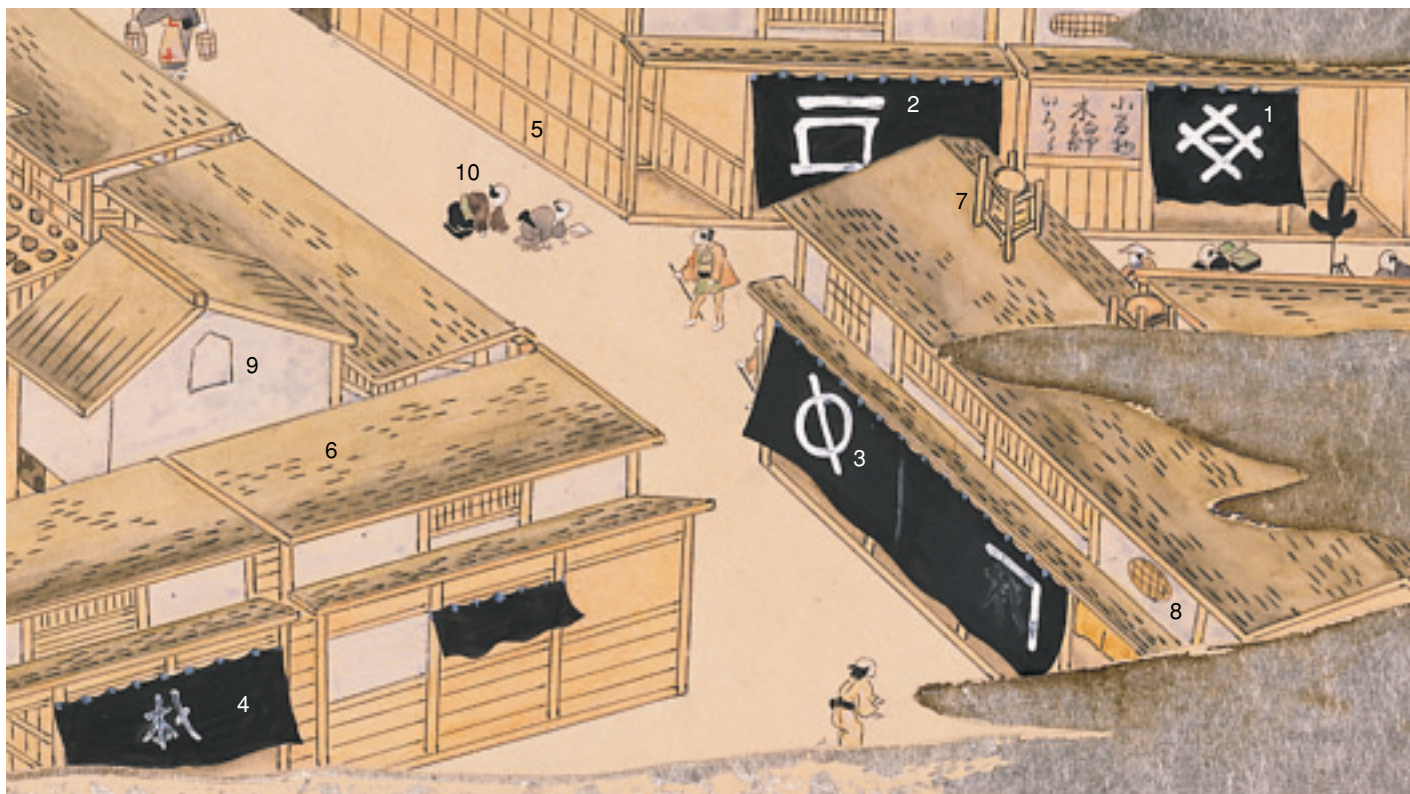
ちなみに、木架(2)の間の通路にもたいてい簾や菅莫蔭(15)を敷いて魚肥となる笹目(鰓)や白子、胴鯿(端鯿。頭部、背骨、腹部、尾の接続したもの)などを干した。しかし、この図絵には描かれていない。省略されたか。

さらに、鯿の粕焚き釜場も描かれていないが、それは鯿粕の登場には19世紀の初めまで待たなければならぬからである。

【参考文献】

- ※ 1 高橋明雄『鯿 失われた群衆の記録』北海道新聞社 1999年 p.61。
- ※ 2 『松前町史』史料編第1巻 松前町 p.382。
- ※ 3 坂倉源次郎「北海随筆」『日本庶民史料生活資料集成』第4巻 三一書房 p.404。
- ※ 4 秩東作「東遊記」『日本庶民生活史料集成』第4巻 p.428。
- ※ 5 拙稿「蝦夷地の鯿漁業と文化財」『月刊 文化財』493号 2004年 p.35。

38 江差町の問屋街



- 1 近江愛知郡出身の※（イゲタイチ）印・福原四郎右衛門店
- 2 近江八幡出身の𠄎（ソトイチ）印・和泉屋西川伝兵衛店
- 3 近江八幡出身の𠄎（輪通し）印・金屋福原九郎兵衛店
- 4 杓（ホンシメ）印・富江藤四郎店
- 5 羽目板戸

- 6 （柿葺きの）屋根（トントン）
- 7 火の見櫓
- 8 虫籠窓
- 9 土蔵
- 10 土下座する町人？

江差経済の中核街、江差町草創地、姥神町と中歌町には町の経済を牛耳った富商（問屋）や廻船業者など、大手近江商人店が軒を並べて建っていた。

日本国に含まれない異域、化外の地たる蝦夷地を抱えた近世期の北海道は「五穀不生の地」「無高の^{※1}所」で、ここの道南の地に拠点を据えた松前藩は金銀の鉱物や林産物、海産物、山丹品（アムール地域などの少数民族との交易品）の交易に藩再生産の基礎を置かざるをえず、本州商人たちの来道と交易を立藩当初から呼びかけた。それにいち早く呼応したのが、全国的に「鋸商内」を展開し、産物廻しの商法を編み出し、「江州泥棒」「江州どら者」といわれた近江（江州）商人である。^{※2}松前藩は呼応してきた近江商人を優遇した。その結果、近江商人は松前、とりわけ江差に出店し、17世紀末には沖の口役所

による出入船とその積載品の改め、収税も代行・実施する半ば税関的機関のような役割を担うようになった。そのこともあり、江差は「商沽の家」が多かった。^{※3}
^{※4}

江差の商人は中二階建ての店を構え、玄関に店印の染め抜き暖簾を掲げ、商売をした。宝暦8年「両濱家名扣」^{※5}などを手がかりに検討すると、図絵の中の※は近江薩摩出身の福原四郎右衛門店（1）であることがわかる。玄関脇の木壁には「小間物・木綿いろいろ」と書かれており、小間物や木綿類を商っていたことがわかる。向かって左隣は両濱商人の近江八幡出身の𠄎（ソトイチ）印・和泉屋西川伝兵衛店（2）である。

両濱商人とは琵琶湖湖畔の柳川・薩摩両村、あるいはその二村を一浜とし、八幡を合わせて両濱と呼

び、それらの村の出身の商人のことをいった。^{※6}初期の北海道は産物の多いわりにその販路も広がらず、また漁業の元資金を支援する者もない状況であった。そこに江州八幡・柳川の町人が出店して米・味噌・諸色を仕送りし、産物の捌き方にも貢献した。この功績によって松前藩主への目通りも許され、他の町人よりも両濱商人は優遇されたのである。^{※7}そのこともあってか、金屋福原（1）、和泉屋西川（2）とも宝暦12年（1762）の松前藩主・資廣の江戸参勤にあたって、それぞれ5両、47両の御用金を負担している。おそらく身代に応じた献金であったろう。寛文元年（1661）には、和泉屋西川（2）と同じく近江八幡出身の忍路・高島両場所請負人となった臼（ナカイチ）印・住吉屋西川伝右衛門が城下松前に出店したが、この住吉屋と臼（ソトイチ）印・和泉屋西川伝兵衛店との関係は不明である。あるいは親類筋の者かも知れない。

㊦（輪通し）印・金屋福原九郎兵衛店（3）も先の和泉屋西川と同郷である。この金屋（3）の横にはのちに小路ができ、幕末から明治初期にその小路には飯盛り女を置く常設私娼街が生まれ、大正初年まで続いた。^{※9}杵（ホンシメ）印・富江藤四郎店（4）も同郷の近江^{えち}愛知郡出身である。宝暦10年（1760）以前から両濱組の一員として江差に出店し、松前国人別を得て土着した呉服太物・仲買・仕込み商である。^{※10}

これら近江商人店は柿葺きの木造中二階建ての店を構え、店の奥、中庭には土蔵（9）を構えて商売

をしていた。金屋（3）は屋根に火の見櫓（7）も備えている。この火の見櫓はおそらく町内商人店の話し合いで、街中の適当な場所に町共同体の公共物として設置されたものであろう。

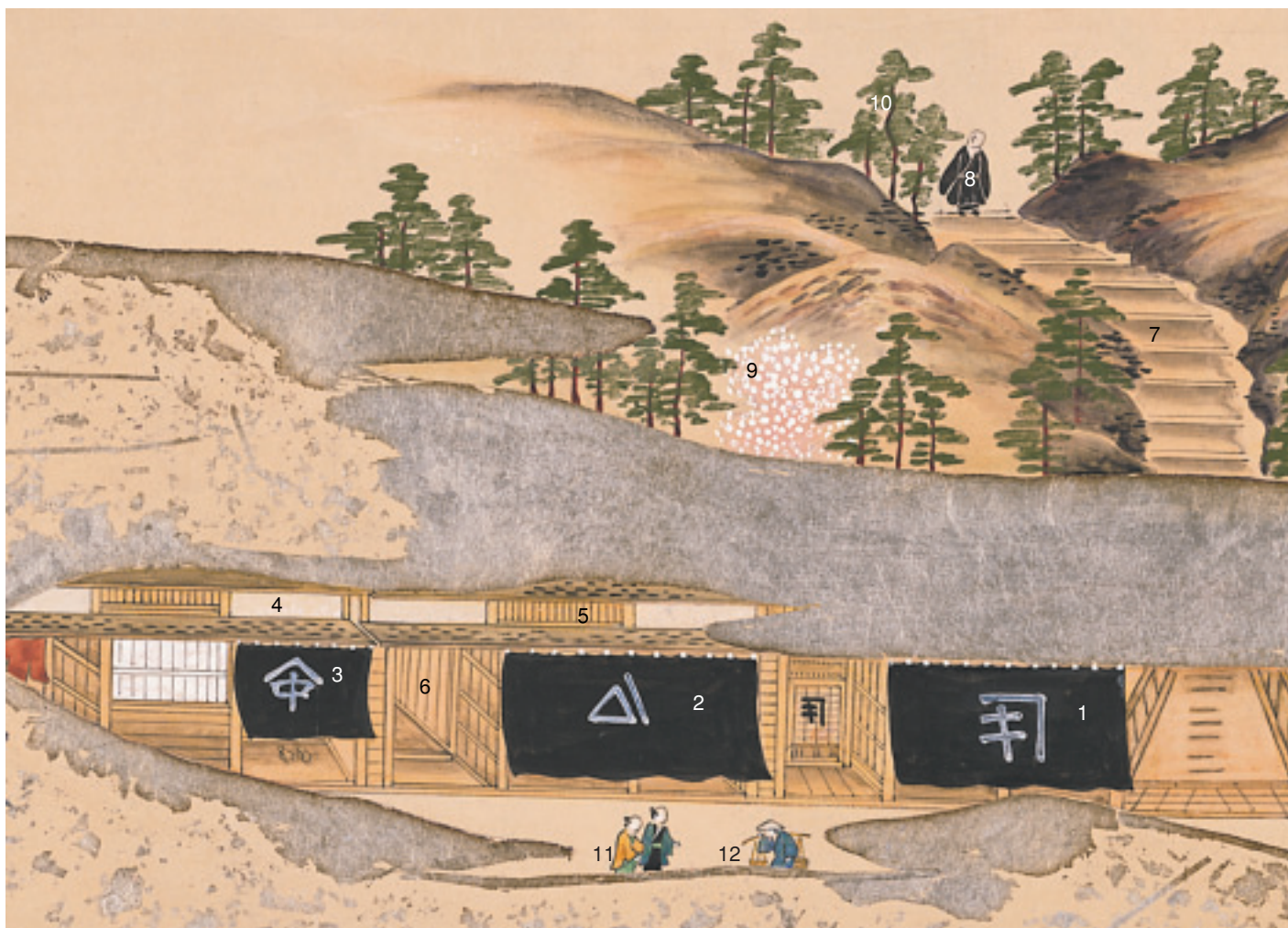
ところで、丁字路の道で旅人らしき2人連れが土下座している（10）が、それは蔵町のほうから武士の団が行列してきたからである。屋根越しに挟み箱持や槍持、草履取の姿がみえることから、役高200俵ほどの格式の武士のように推測される。

この屏風絵が描かれたと思われる時期後の天明8年（1788）、幕府巡検使に随行して江差町を訪ねた古川古松軒の見聞によると、「江指という浦は至ってよき町にて、家数千六百余軒、端はずれに至るまでも貧家と見ゆる家はさらになし。（略）町に入り見れば、呉服見世・酒見世または小間物屋、この外諸品店ありて、物の自由なることは上方筋にかかわらず。御巡検使拝見に出でし貴賤・老若の男女を見れば、縮緬の単物に白あけ上りの染めぬきの紋など付けて、人物・言語もよく、辺鄙の風俗なし。委しく聞くに、近江・越前より出店数多ありて、上方よりもの多し^{※11}」という。江差はかなり経済も活発で裕福な湊町であったことがわかる。しかし、江差経済を牛耳ってきた、さしもの近江店も18世紀初めには鯁漁の不漁に見舞われ、大半が閉店の憂き目にあった。なかにはより多くの利益を求めて、蝦夷地漁場経営者として場所請負人に転じる者もいた。替わって地場商人が台頭してくることになる。

【参考文献】

- ※ 1 『東遊雑記』 東洋文庫27 p.116。
- ※ 2 渡辺守順『近江商人』教育社歴史新書106 pp.12-21。
- ※ 3 『江差町史』第5巻通説1 pp.243-244。第5章2。
- ※ 4 東寧元頼「東海参譚」文化3年『日本庶民生活史料集成』第4巻 三一書房 1969年 p.26。
- ※ 5 『新撰北海道史』第2巻通説1 pp.118-119。
- ※ 6 『新撰北海道史』第2巻通説1 北海道 1937年 p.117。
- ※ 7 平秩東作「東遊記」前掲『日本庶民生活史料集成』第4巻 p.419。
- ※ 8 『開拓の群像』中 北海道 p.35。
- ※ 9 前掲『江差町史』 pp.820-821。
- ※ 10 『江差町史』資料編第2巻 pp.389-390。
- ※ 11 前掲『東遊雑記』 p.121。

39 江差町草分けの商人店と順正寺への道



- | | | |
|---------------------|-----------|-------------------------|
| 1 弔（カネキ）印・岸田三右衛門店 | 5 虫籠窓 | 9 桜木？ |
| 2 △（ウロコカタヤマ）印「辻甚」店？ | 6 障子木戸 | 10 蝦夷檜 |
| 3 卐（ヤマナカ）印・中屋 | 7 順正寺へ板坂道 | 11 道行く町人 |
| 4 土壁 | 8 袈裟を着た僧 | 12 杓（天秤棒、荷鍵）を担ぐ棒手振り商人か？ |

承応2年（1653）年に創建された一向宗の寺、順正寺に行く上り坂道（7）入口界隈の様子である。順正寺は松前城下の専福寺6世浄玄が九艘川町の高台に建立し、弟子順正を留守居にしたことからこの名がついたという。延宝6年（1678）、天保6年（1835）と二度にわたる火災で焼失した。この間の宝永5年（1708）に浄願が境内に順正寺庵（円通寺）を建て、天保10年（1839）に旧地の北寄りに順正寺が再建され、明治12年（1879）に本願寺別院順正寺と改称された。2年後、またまた九艘川町の火災で類焼の憂き目にあい、明治25年に再建され、同27年本願寺江差別院となった。^{※1}

この順正寺から黒い袈裟を着た坊主（8）が下ってくるが、図絵からみる限り、姥神大神宮の後ろにある法華寺へいく道が板坂道であったように、この坂道（7）も板道であったように推測される。だが、松浦武四郎の記録、『校訂蝦夷日記〔二編〕』（北海道出版企画センター、1999年）にも、このことは記されていないので、板坂道でなかったかも知れない。だが、図絵は武四郎が訪れた19世紀初めを遡ること、約90～100年前のことであり、図絵を見る限り、19世紀初め頃、法華寺坂が板坂であったように、同じ坂道であった蓋然性は高い。この道の上や両側にある木々は蝦夷檜（10）である。（9）は鯨

漁の季節柄、桜であろうか。

順正寺を下ってくる道の、向かって右側の商店は九艘川町にある卍（カネキ）印・岸田三右衛門店（1）である。岸田家は近江商人が多い江差町にあって、珍しく能州正院（珠洲市）出身の商人である。正確な年代は特定できないが、享保期（1716～35）には台頭し、以後安政期（1854～59）まで江差を中心に、鯨漁民などへの仕込み（前貸し）金主、栄寿丸などの北前船船主として西在郷一番の富商となり、江差経済を牛耳った。江差草分けの商人でもある。

仕込み（前貸し）とは、着業するには着業資金が必要不可欠であり、金主から資金や生産用具・物資、その他の融資を受けて着業し、後日、一定の利息を加えて元利返済する方法である。とくに、刺網・建網、鯨船、干場、労働力、それに近世北海道の未だ非農業地帯という条件にもよる稼業期に必要な食料（米・味噌・醤油）などや日常生活必需物資の確保など、鯨漁業の場合、かなりの着業資金や生活物資を必要としたために、資金力に乏しい操業者は仕込み金主の存在なしには操業できなかったのである。

当然、その仕込みの保証には抵当物件が要求され

た。抵当物件としては家屋、地所、漁具、漁船、時には娘や息子が担保として入れられたが、岸田家の仕込み関係文書をみると、多くは鯨漁民への前貸しで、その抵当物件は各種鯨船が多かった。また岸田家の仕込み品の仕入れ先範囲は日本海から瀬戸内海、兵庫・大坂まで及んだ。^{※3}

岸田家の向かって左隣の家も△印の商人店（2）である。屋号は描かれているが、不明である。ただ、岸田三右衛門家の仕込み関係資料、寛政8年の「仕入儀定一札之事」に同じ屋号が書かれた印鑑が載せられている。それには「松前江指 辻甚」とあるが、近江店か否かも、業態も不明である。令印は宝暦8年（1758）の「両浜家名扣」によると、近江両濱組商人の中屋（3）である。ただ、辻甚と同様、業態は不明である。

以上の3軒の商人店がある九艘川町の前を、2人連れの町人（11）が北豊橋に向って歩いている。そこを編み笠を被り、大枋（天秤棒）に籠を担いで詰石町^{おおご}の方向に歩いていく行商人のような人物（12）が描かれている。菅江真澄はこの大枋を江差では「荷鍵」というと伝えている。^{※5}

【参考文献】

- ※ 1 『江差町史』第6巻通説2 1983年 p.844。
- ※ 2 松浦武四郎『蝦夷日誌』p.150。
- ※ 3 「江差商人取引文書」「仕込関係資料」『江差町史』資料編第2巻 pp.43-324、pp.1031-1032。
- ※ 4 前掲『江差町史』資料編第2巻 p.575。
- ※ 5 「蝦夷喧辞辯」『菅江真澄全集』第2巻 p.62。

40 土蔵群と梱包鯨製品の荷役、その検査



- | | | |
|-----------------|-------------|-------------|
| 1 土蔵 | 5 藩の沖の口番所役人 | 8 旅商人（たべど）？ |
| 2 乾燥した鰹や内臓の梱包荷？ | 6 魚場売り | 9 便船 |
| 3 梱包干鯨や身欠鯨、数の子？ | 7 大杓（天秤棒）と籠 | 10 丸屋形（浜小屋） |
| 4 人夫 | | |

図絵の浜辺は江差町の浜茂尻町と地続きの、海に突き出た津鼻町岬界隈の前浜である。「海中に突出るが故に」津鼻町といい、そこは「汐干る時は凡2^{*1}丁も海中へ出る」所でもあった。

そこにはひととき目立つ、丈夫で頑丈な立派な土蔵(1)が狭い浜に所狭しと立ち並んでいた。それぞれの土蔵(1)の間には津鼻町へ駆け上る階段道が続いていた。その土蔵は一見して、土壁むき出しの土蔵ではないことがわかる。天明8年(1788)、幕府巡見使に随行して江差町に来た古川古松軒の見聞によれば、「土蔵も檜板・楨板にて包みまわして綺麗に見ゆ^{*2}」る土蔵(1)であった。かなり前から化粧板で施されていたことが知りうる。檜板・楨板で包みまわした土蔵は江差に進出した近江商人店に多く、江差商人の繁華を象徴するものであった。これらの土蔵には、本州各地からの日用諸雑貨品をはじめ、販売品などが保管されていた。

土蔵(1)の前には船荷出し前の乾燥した鰓や内臓(肥料、2)や干鯨・身欠鯨・数の子(3)などが梱包され積み上げられている。一カ所に鯨梱包荷を集め終わったからであろうか、その側では荷役人夫(4)が一休みしている。頬被りや菅笠、頭巾を被っている者など、荷役作業をする者たちの格好はまちまちである。

その右手では商家の番頭が帯刀した沖の口番所役人5人(5)を相手に何やら説明している様子である。おそらく津出しする鯨荷の荷役改めの問いに対して、一つ一つ答えているのであろう。実はこことは別の場所では、商家の帳役が出向いて荷役人夫の運んできた鯨荷物の上に腰掛け、荷数を品物ごとに記帳している様子も描かれている。荷改め役人にはその記帳に基づいて申告しており、検査はかなり厳格に行われていたことが理解できる。

荷改めのその側を大枋(天秤棒。「にながき」ともいう^{*3})に箆を下げた(7)「魚場売り」(南蛮売、灘商とも、6)が通り過ぎている。南蛮売とは納屋場に出向いて商いをすることからいわれたといい、その多くの者は佐渡・越後からの行商人であり、鯨^{*4}

漁中に餅や酒、菓子、果物、小間物、子供の手遊びものなどを背負い、売り歩く行商人である。代価は漁獲鯨で清算されたという。

また、かれらは鯨漁の時期には重要な役割を役として担った。それは鯨群来の時、「合図の立火をなす^{*5}」ことであった。大枋に箆を下げた者(7)も「魚場売り」であろうか、それとも在郷を廻り戸別訪問をして売り歩く単なる旅商人(たべど)であろうか。^{*6}彼の前方には、頭巾を被り、風呂敷包みを肩に掛けた刺子姿の旅人(8)が、船頭の呼びかけに便船(9)に向かおうとしている。あるいは、鯨漁が終わって「あご」(網子)別れ(終漁した後の宴と歩合給の受け取り)をした秋田、津軽、南部などの東北出身の日雇い漁夫であろうか。これから松前方面へ出かけるのであろうか。というのも、鯨は蝦夷地から南下し、次第に江差以南の上の国、松前方面へ群来するからで、日雇い漁夫ならば、そこでの一稼ぎに出かけるということも考えられるからである。

なお、この便船(9)は図絵をみると、櫂が両舷に3つずつあり、鯨舟より大きい舟である。しかし、帆柱が立てられる鯨舟の三半船より小さく、おそらく海岸沿に客を運ぶ商舟であったろう。ただ、古川古松軒『東遊雑記』(東洋文庫27、平凡社 1964年 p139)には鯨漁に使う磯舟、ハンタ船、スアイ(図合)船より大きな商用の船があったとして、商船を「本船」といったとあるが、図絵の舟(9)はむしろ磯舟に近い舟である。ごく身近な鯨場を巡る船であったろうか。

土蔵(1)の前浜に建つ円錐形の小屋がけは浜小屋(10)である。本『絵引』36でも説明したが、鯨漁の時期に、漁民たちが漁の合間に休憩したり、暖をとったり、食べ物や飲茶、煙草を一服するために一時的に建てられた休憩場である。時には鯨と他のものとの物々交換の場ともなった。数本の棒を円錐形にして括り、それを葎で巻きつけて組み立てた簡単な小屋である。突端は煙だし用に少し空けてある。菅江真澄はこれを「丸屋形」(マロヤカタ)と

いい、東海岸では昆布採り漁で使う「円舎」（マルヤカタ・マルゴヤ）ともいっている。もともとはアイヌの人たちが漁猟や交易のために遠方に船で出かけて行く際の簡易宿泊手段であった（菊池勇夫「陸小屋・丸屋形」『近世生活絵引』北海道編解説参照。「えぞのてぶり」『菅江真澄全集』第2巻、未来社1971年 p93～94）。

だが、江差前浜の浜小屋は19世紀以降、その役割が変化した。江差居住の者が鯨漁中に自分の家を

商人に貸し、その家の者は砂浜に仮の浜小屋を建て、これに住んで「餅、酒、菓子、くだもの、小間物の類を商ひ、或は料理茶屋」などを営み、「昼夜となく三味線、太鼓にて賑う」飲食遊興、酒色を業とするようになったからである。^{※7}幕末、それは5、6月ごろ蝦夷地から戻ってくる出稼ぎ漁民を相手に、津鼻町から中歌町まで浜一面に浜小屋が立てられ、ここでは女郎屋を営む者も出現した。こうした小屋も7月末には取り払われた。^{※8}

【参考文献】

- ※ 1 松浦武四郎『蝦夷日誌』（弘化3年〈1846〉） 北海道出版企画センター 1999年 p.145。
- ※ 2 『東遊雑記』 p.121。
- ※ 3 「蝦夷喧辞辯」『菅江真澄全集』第2巻 p.62。
- ※ 4 前掲『江差町史』第5巻通説1 pp.789-790。
- ※ 5 松田伝十郎「北夷談」『日本庶民生活史料集成』第4巻 p.161。
- ※ 6 前掲『江差町史』 p.785。
- ※ 7 松田伝十郎「北夷談」『日本庶民生活史料集成』第4巻 三一書房 1969年 p.160。
- ※ 8 松浦武四郎『蝦夷日誌』巻之一 北海道出版企画センター 1999年 p.146。

41 鷗島（弁天島）に舫う船々



- 1 キネツカ
- 2 蛭子浜
- 3 中の浜
- 4 五郎兵衛浜
- 5 テツカヘシ
- 6 巻物隠しの窟
- 7 エンカマ
- 8 千畳敷
- 9 ヒズメ石
- 10 弁天社
- 11 蛭子社
- 12 弁財船
- 13 弁財船の帆柱

島は江差町の津鼻・姥神両町の前浜にある鷗島である。空飛ぶ鷗の姿に島の形が似ているところから、鷗島と命名されたといわれる。

この島の地理や情景、社の由来などは松浦武四郎の弘化3年（1846）の「再航蝦夷日誌」（『三航蝦夷日誌』吉川弘文館 1972年）に詳しい。それによると、島の周囲はおよそ1里ほどであり、ほとんどが岩礁・絶壁である。だが、この島が江差町前浜の前面にあることで、大型和船（弁財船、12）の風避けや繫留場所としての機能を高めていた。それは島の回りの水深が深いところでは11～12尋もあるからである。

江差では秋から春3月にかけては西北風の風が厳しく、鷗島でも大型和船の繫留が困難であった。しかし、夏は千余艘も停泊し、夏のうちは300艘の入船が絶えることがないくらい良い湊であった。しかし、その繫留場所は沖からの風を遮る江差町前浜と島との間の内陸側のみの沿岸である。図絵にも繫留船は弁天社（10）の鳥居の背後に林立する船の帆柱（13）によって描かれている。この辺は、和船の繫留に必要な水深が2～3mあり、しかも海岸の岩には繫留杭も施されていて便利であった。

五郎兵衛浜（名前の由来は不明、4）にはこれから繫留するのか、あるいは出帆するためか、帆柱の中ほどまで帆をあげた、あるいは下げた和船もいる。

島の手前には、2枚重ねの木綿布を太い糸で刺子

にした木綿帆（刺帆）を張って航行する和船が3艘いる（12）。いずれも同規模の和船である。帆は布を3幅つなぎ合わせ、総幅3尺程度の帆布に仕立てたものが帆1反である。3尺幅の刺帆は18世紀初頭まで主用されたが、それ以降は廻船に限って2.5尺前後の狭い帆になったという。それによって、3尺幅の帆では21反であったが、2.5尺幅の帆では25反に変わった。この小幅への移行時期はだいたい享保（1716～1735年）初年頃とみられている。また、木綿帆の採用によって、上下の帆桁が上の帆桁だけになり、帆裾の帆足を大渡し綱で止めるように改良して帆に大きな脹らみを与えることができたようになったという。^{*1}

こうした研究成果から図絵の和船を見直せば、和船（12）は11反帆であり、これが正しく描かれているとしたら100～200石前後の和船であったといえようか。しかも、宝暦期（1751～63年）から日本海廻船は荷所船（賃積船）から買積船（北前船）に替わったといわれる。^{*2}この荷所船とは、上方（京坂）～近江～敦賀・小浜～松前～蝦夷地の航路を掌握し、ほぼ独占的で巨額な利益を獲得していた近江商人の従属と差配下にあって、敦賀や小浜と松前・蝦夷地を結ぶ海運活動を行っていた船である（斎藤善之『右近権左衛門文書目録』解題 1996年 河野村 p11）。こうした事実からみて、この和船は初期の弁財船であるといえようか。船上には舵を操る

船頭をはじめ6人の水主がいる。また、ミヨシ（舳）には鍛造品の四爪碇が4つ装備されているが、図絵には片側の四爪碇2つしか描かれてない。

こうした北前船にとって、繫留、あるいは近くを航行する鷗島の中で、蛭子社（11）が建つ絶壁下の蛭子浜（2）は大船を繋げられる一番良い場所であった。したがって、そこから津鼻町のほうへ小舟で行き来もできた。このところは崖であるが、平地もあり、しかも海には磯草・小鮑・蠣螺類が多く、春夏には人々が弁当や酒肴を携えて遊びにきたという。

キネツカ（1）とテツカヘシ（5）は、ともにアイヌ語の地名、「崖が落ちるのが聞こえる所」と「そりかえっている所」という難所を、またエンカマ（7）とは「悪い平岩」を意味した。エンカマには常時、海水がたまる岩穴が大小数個あり、それを「弁慶の足跡」に擬え、義経伝説も伝えている^{※3}。義経伝説による名称は他にもあり、巻物隠しの窟（6）も弁慶がこの岩穴に巻物を隠したという故事による。弁慶伝説のほかにも、この島には大蛸伝説がある。その伝説とは、大蛸がこの島の主で、島を7巻半巻く足があり、お寺に納める釣鐘を運んできた弁財船の釣鐘欲しさに、大蛸が船を海中に引きずり込もうとするので、釣鐘を船から海中に投じて難を逃れたという故事である^{※4}。

畳を千畳も敷けるという意味の千畳敷（8）では、松前藩主の来航時に「汐見亭」という宴席がはられ

た。それはすでに宝暦年間（1751～63）には行われており、小玉貞良筆「江差屏風」にはその様子が描かれている^{※5}。なお、テツカヘシ（5）には幕末に台場が築造され、100目、300目の大砲の砲台が据えられた^{※6}。

鷗島で最も重要な神社は島の北側にある村人建立の弁天社（10）である。朱の鳥居をもつ。鷗島はこの弁天社の存在から別名、弁天島とも呼ばれ、幕府巡見使の調査場所にも入っていた。建立年代は元和元年（1843）との説もあるが、はっきりしない^{※7}。弁天社は江差町の姥神町にある姥神大神宮に祀られた老女、折居（於隣）が建てた神社といわれ、姥神大神宮の摂社である。於隣は往古、江差住民に鰯漁業を教えた老婆で、海の神（竜神・弁天・船霊）の加護を念ずる廻船関係者や地場商人たちの信仰を集めた^{※8}。したがって、天保14年（1843）の加賀橋立廻船中寄進の大鳥居や、江差廻船中と江差問屋寄進のそれぞれの狛犬、手上鉢などが存在する^{※9}。なお、姥神大神宮が所蔵する「社記伝記控」によると、大神宮の建立年が不詳とはいふものの、「弁財天の鎮座は姥神に同じにせん哉、年暦詳ならず」とある。明治元年、弁天社は巖島神社と改名された^{※10}。

神社はもうひとつある。漁家の信仰を集めた蛭子社（11）である。祭神事代主神を祀る姥神大神宮付属社である^{※11}。生産の神である。創立は16世紀中ごろといわれるが、不詳である。老築化のため大正初期、弁天社に合祀、廃社となった^{※12}。

【参考文献】

- ※ 1 石井謙治『図説和船史話』至誠堂 1983年 pp.88-89、p.103。
- ※ 2 「江差町史年表」『江差町史』第6巻通説2別冊 p.21。
- ※ 3 宮下正司『江差風土記』自費出版 1991年 pp.53-56。
- ※ 4 『江差町史』第6巻通説2 pp.799-800。
- ※ 5 『江差町史』第5巻通説1 口絵写真。
- ※ 6 弘化3年、松浦武四郎『蝦夷日誌』北海道出版企画センター 1999年 p.152。
- ※ 7 前掲『蝦夷日誌』、松浦武四郎「渡島日誌 巻之参」『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター 1988年 p.114。
- ※ 8 前掲『江差町史』第6巻通説2 p.800。
- ※ 9 前掲『江差風土記』 p.56。
- ※ 10 前掲『江差町史』第6巻通説2 pp.811-812。
- ※ 11 前掲『江差町史』第6巻通説2 p.814。
- ※ 12 前掲『江差風土記』 p.57。

42 蝦夷地漁場に急ぐ追鯨漁者たちと荷舟



- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1 津鼻町の浜 | 7 荷舟 |
| 2 便舟 | 8 中遣舟 |
| 3 櫓 <small>なば</small> | 9 アツシ（アットウシ）帆 |
| 4 魚場売り | 10 鷗島（弁天島） |
| 5 天秤棒と籠 | 11 林立する弁財船の帆柱 |
| 6 旅商人（たべど）？ | |

津鼻町つばなまちの前浜辺りからの舟による荷出し（7）と蝦夷地へ急ぐ舟（18）であろう。18世紀の中ごろにはまだ、沖の口番所は中歌町にあったが、19世紀中ごろには津鼻町に移転した（松浦武一郎『蝦夷日誌』北海道出版記念センター 1999年 p145）。だが、番所の移転前から津鼻町の前浜（1）は荷物の出入や鷗島への行き来も便利な場所であった。図絵がこのことを物語っている。津鼻町はさしずめ江差町の物流拠点ともいべき場所であったともいえるようか。

そこからは荷物だけでなく、人びとの蝦夷地やほかの松前地地域、本州への行き来も舟でなされた。1人乗りの櫓なばを漕いで、海上を進んでいる舟（2）は人や旅人の荷物を近場に運ぶ舟であろう。その前方を行く3人乗りの舟は津鼻町の前浜から江差の隣町小山村から乙部村、松前地と蝦夷地の境界で関所がある熊石村などへ荷物を運ぶ、少し大きめの荷舟（7）であろうか。あるいは、鷗島（弁天島、10）に繫留する大型弁財船（11）に荷物（鯨や鮭などの漁

獲物など）を運ぶ荷舟（7）か。それにしては舟の舳先をみると、鷗島とは方向が異なっているように思われる。あるいは、汐の流れの関係からか、鷗島へ迂回して向っているのかもしれない。

帆掛け舟は蝦夷地の鯨場、すなわち場所の請負人（商人）が支配し漁業経営を行っている蝦夷地の場所おいにしんりように向う中遣舟（8）のようである。追鯨漁（蝦夷地場所の出稼ぎ鯨漁）に従事する二八取りといわれた追鯨漁者の通い舟であろうか。二八取りとは入漁した場所の請負人に漁獲物の2割を支払い、残りの8割を自分の収入とする契約条件から生まれた出稼ぎ鯨漁者の呼称である。この蝦夷地追鯨漁は享保4年（1719）以降、熊石以北から西蝦夷地うたすつ歌棄場所まで、天明4年（1784）頃には小樽内場所まで許可された。

こうした蝦夷地場所での操業免判（許可証）をえて通う舟が中遣舟なかやりぶね（通い舟、8）である。追鯨漁者は自ら操業資金を準備し、漁具や加工道具、資材、食料などを中遣舟に積み込んで蝦夷地に通った。な

かには、小親方経営的に数名から数十名の雇漁夫を数艘の中遣舟に乗船させて、蝦夷地へ向かう者たちもいた。中遣舟はあくまでも追鯨漁者の出漁や漁獲鯨積取のための舟であって、蝦夷地の各場所と江差などとの間を行き来する99石以下の小規模な舟（中渡舟ともいう）である。天保11年（1840）には8人乗り250石まで許可となる（文久2年「港省衙規則」『江差町史』資料編第1巻 p29、37、38）が、中遣舟はあくまでも江差在々の百姓（漁民）の持ち舟でなければ許可されなかった。大型鯨積取舟の規制である。

だが、幕末には追鯨漁者へ仕込み（前貸）をする江差問屋が増えてくると、問屋の出資に基づく小廻舟が建造されるようになる。これは名目上、江差の漁民の持ち舟とされたが、実態が異なり、松前藩も

この実態を踏まえて別の規制を設け、江差問屋関係の舟と位置づけ、舟役金徴収も別取立てにして対処した。しかし、この小廻舟は、18世紀にはまだ出現していなかったろうと推測される。

いずれにしろ、鯨舟、中遣舟などの舟団を組んで漁者たちは蝦夷地に出漁したのであるが、当初は保津舟（3尺1寸～4尺3寸）や三半舟（4尺4寸～5尺3寸）を使って出漁した（前掲『江差町史』p472）。三半舟は帆柱を付けて帆を張り、蝦夷地通いもできる舟である。それより大型の乗替舟、囃合舟では蝦夷地通いは比較的容易であった。したがって、アットウシ帆（9）の舟はその乗り組み人数5人からみても中遣舟ではなく、その役割を兼用した三半舟から囃合舟の漁舟であったとみることも可能である。しかし、確証は得がたい。

【参考文献】

- 石井謙治 1983年『図説 和船史話』至誠堂。
石井謙治 1995年『ものと人間の文化史 和船』法政大学出版局。
江差町 1977年『江差町史』資料編第1巻。1978年 同資料編第2巻。1979年 同 資料編第3巻。1981年 同資料編（関川家文書）第4巻。1982年 同第5巻通説1。1983年 同第6巻通説2。
大空社 1998年『訓蒙図彙集成』第1巻。
大林組 1989年『漁場』No.29。
国書刊行会 1977年『北海道漁業志稿』北水協会編、北水協会。
須藤功編 1988年『写真でみる日本生活図引』全5巻 弘文堂。
須藤利一 1975年『ものと人間の文化史 船』法政大学出版局。
誠進社 1978年『和漢船用集』『日本産業資料大系』11巻。
高橋明雄 1988年『るもい沿岸 ニシン場物語』朔北詩話会。
高橋明雄 1999年『鯨 失われた群衆の記録』北海道新聞社。
田島佳也 1986年「近世後期漁獲鯨の集荷課程」『歴史と民俗』1平凡社 pp.178-183。
東京大学出版会 1960年『日本産業史大系2 北海道地方編』地方史研究協議会編。
秦 憶磨 1982年『蝦夷島奇観』雄峰社。
服部義高 文化7年「廻船安乗録」滝本誠一編 1978年『日本産業資料大系』第11巻 日本図書センター。
羽原又吉 1982年『日本近代漁業経済史』第2章 上巻 岩波書店。
北海道教育委員会 1970年『日本海沿岸ニシン漁撈民俗資料調査報告書』。
北海道新聞社 1993年『北海道の民具』。
北海道水産部漁業調整課 1957年『北海道漁業史』北海道水産部漁業調整課。
北海道庁 1937年『新撰北海道史』第2巻通説1 北海道庁。
北海道留萌市 1999年『留萌市ニシン漁撈調査報告』。
余市水産博物館 2001年『鯨が群衆たころ』（第27回特別展展示解説書）。
留萌市海のふるさと館 2003年『ニシン漁の船』。